講演

〝格差〞があってもいいじゃない

道新文化センター社長　杉　江　良　之

はじめに

皆さんおはようございます。本題に入る前に少し自己紹介を致します。実は、こうして皆さんの前でお話しするのは今回で二度目です。今から数年前、私の娘が札幌大学の経済学部に籍を置いていた当時のゼミの先生からのご依頼でこの壇上に立ったことがあります。

私は1947年に東京で生まれました。大学を卒業するまで東京の文京区で過ごし、1969年、縁あって北海道新聞社に記者として入社しました。どちらかといえば経済取材の経験が長く、その間、東京支社勤務、パリ特派員なども経験しました。今年の6月末まで2年間北海道新聞の東京支社長を務め、7月から現職となっています。いわゆる団塊の世代の一期生で、来年の1月に還暦を迎えます。そんな私の経験、体験をもとに最近マスコミをにぎわしている格差論議について自分なりの考えをお話してみようと思います。

高度経済成長期

日本の敗戦から11年後の1956年、時の経済白書が「戦後は終わった」と宣言しました。1958年には戦後復興のシンボルとも言える東京タワーが完成し、最近、その時代背景を見事に描いた映画「オールウェイズ～三丁目の夕日」が大ヒットしました。

映画の主人公の一人である少女は集団就職列車に乗って東北から上京します。当時、中学を卒業した少年少女は「金の卵」ともてはやされましたが、それは、労賃が安い若年労働力を工場が立ち並ぶ東海道ベルト地帯に駆り出すための美辞麗句でした。

歌謡曲の世界でも東京への憧れを助長する動きが顕著でした。時代は多少前後しますが「東京だよおっかさん」、「柿の木坂」、「有楽町で会いましょう」などのヒット曲が上京志向に拍車をかけたのです。もっとも、こんな曲名を聞いても皆さんはピンとこないでしょうが……。

1960年、所得倍増計画をスローガンにした池田内閣が誕生し、日本の高度経済成長が本格的に始まります。4年後の東京オリンピックを契機に東海道新幹線が開業し、東海道ベルト地帯を中心に経済成長が加速しました。

実は、この頃にも格差論議はあったのです。私たちの中学、高校時代の社会科の授業でよく聞いた言葉に「経済の二重構造」というのがあります。成長著しい大企業と取り残される中小・零細企業。大企業が多く立地する都会とそうではない地方。まさに二重構造とは格差そのものを意味していました。

若者の流出が続いた地方では息子、娘を送り出した家族が寂しい思いを強いられましたが、その代わりに「三種の神器」と呼ばれた冷蔵庫、洗濯機、テレビが田舎の隅々にまで普及するようになったのです。皆さんには笑われそうです

(注) この講演は、2006年11月27日、札幌大学経済学部附属地域経済研究所が主催して行われた講演会の記録である。

が当時、冷蔵庫のことを電気冷蔵庫といっていました。それまでは氷で冷やす冷蔵庫が普通だったからです。

少し時代が下って1972年、日本列島改造論を掲げた田中角栄内閣が誕生しました。国土の均衡ある発展を合い言葉に全国いたるところで土木・建設工事のつち音が響き渡りました。札幌オリンピックが開かれ、地下鉄南北線が開通したのもこの年です。

翌年の1973年には中東の産油国が減産と値上げに踏み切り、原油の大半を砂漠の国に依存していた日本経済は石油ショックの大波に飲み込まれました。急速にインフレが進み、狂乱物価の嵐が吹き荒れる中でトイレットペーパーの買い占め騒動が連日マスコミをにぎわしたのです。

バブルの時代

しかし、日本の高度経済成長はその程度のことではへこたれず、やがてバブル経済と呼ばれる領域にまで上り詰めていきました。

私が北海道新聞の特派員としてパリに赴任したのは1988年の秋でしたが、その頃、日本経済の中心である東京の大手町、丸の内界隈では「日本はとっくに西欧諸国を追い越した。アメリカに追い付き、追い越すのも時間の問題だ。その証拠にわが国の地価総額はアメリカの二倍になった」、「これからの日本は物づくりではなく金融立国でやっていける」といった議論が大手を振ってまかり通っていました。

ジャパンマネーがニューヨークのロックフェラーセンターを買収したことから、パリではエッフェル塔が日本資本の軍門に下るのではないかと噂されたりしました。事実、有名なカフェがある建物に日本企業の看板が掲げられ反発を招いたこともありました。

時を同じくして、トヨタと日産の超高級車の輸出価格が日本の国内価格より低かったため諸外国でダンピング批判が起きました。これに対し、両社の社長がそろって記者会見し「日本では高い価格を付けなければ売れない。輸出価格を下げているのではなく、国内価格を高く設定しているだけだ」と反論したのです。これを聞いたフランスの友人、知人は口をそろえて「そんなばかな話は無い。同じ商品なら少しでも安く手に入れようとするのが世界共通の価値観ではないか。高くなければ買わない、そんな人種がこの地球上に存在するなんて到底信じられない」というのです。私としても返答に窮してしまいました。

フランスから帰国したのが1991年春。ほぼ時を同じくしてバブル経済は破綻しました。土地の取得に回る資金の総量を規制する動きが直接のきっかけでしたが、まさにシャボン玉がはじけるようにその終わりはあっけないものでした。いくら日本の地価総額がアメリカの二倍になったからといって、札束でアメリカの国土を買えるわけがありません。世界のひんしゅくを買う成り金の思い上がった論理が水泡に帰すのは自明の理だったと言うべきでしょう。

バブルの崩壊で日本経済は「失われた10年」といわれる意気消沈の時代に直面しました。ところが、東京では六本木、お台場、汐留、品川などの地区で各種の再開発事業が展開され、超高層ビルがニョキニョキと立ち並ぶようになりました。

その代表例が六本木ヒルズで、ライブドアの通称ホリエモン社長に象徴されるヒルズ族が話題をさらったのも記憶に新しいところです。「お金で買えないものは無い」と豪語したホリエモンは結局被告人の立場になったのですが、まさにバブルの再現を思わせる一幕でした。と同時に、ヒルズ族のような人びとの登場が今日の格差論議の高まりをもたらしました。

一皮向けば

ヒルズ族に象徴される東京の繁栄は本物なのでしょうか。超高層ビルのオフィスに隣接するこれまた超高層の超豪華マンションに住む一部の金持ちはともかく、超高層ビル群の職場に通

う普通のサラリーマン、OLはラッシュにもまれての〝痛勤〞を余儀なくされます。

夜の地下鉄で心が凍るような光景を目の当たりにしたことがあります。足元が少々おぼつかない老紳士がホームに入ってきた電車の空席に座ろうとしたその時です。横合いから突進してきた年のころなら30前後のOLらしき女性が老人を突き飛ばすようにして座ってしまったのです。「何をするんだ」と声を震わせる老人。次に周囲の者が聞いたのは信じ難い言葉でした。「うるせーんだよ。こっちだって疲れてんだ」。

長時間通勤はこんな〝知恵〞も生み出します。朝夕のラッシュアワー並みに混雑した地下鉄の終電車。つり革につかまっているオジサンが「おえっ」、「うぐっ」と今にも吐きそうな仕草をします。前に座っている若い女性が危機を察知して飛びのいた瞬間、その男は席につき、何食わぬ顔をして読書を始めたではありませんか。実際に車中で「小間物屋」を開業してしまう酔っ払いがいるだけに、席を「譲った」女性のとっさの判断も無理からぬものがあります。それにしても巧妙というべきか、悲しい手口というべきか……。

東京では片道1時間どころか2時間の通勤も珍しくありません。札幌なら30分から1時間といったところでしょうか。会社への行き帰りに要する時間が東京は札幌の2倍、札幌は東京の半分という計算になります。札幌の方がそれだけ自分の時間、つまり可処分時間が多いわけです。

別な比較をしてみましょう。地価がべらぼーに高い東京では居住空間の「狭い、高い、遠い」を我慢しなければならず、庶民が足を運ぶ居酒屋などもすし詰め状態です。パチンコ店の座席の配列もぎりぎりまで狭めてあり、足を組むと店員に厳しくしかられる店もあります。一人一人の可処分空間は極端に切り詰められています。

金銭的には東京の方が恵まれているように見えるかもしれません。給与所得者、言い換えればサラリーマンの年収は、私の記憶に間違い無ければ全国平均が500万円。道内は350万円で東京は700万円です。道内に比べれば東京の年収は2倍の水準にあるわけです。

しかし、本当に東京の方が豊かなのでしょうか。よく衣食住といいますが、まず「住」の確保に多くの出費を余儀なくされる。地価の反映で外食費などが高い。おのずと「衣」に回るお金が少なくなる。私の家内はよく「東京の人って着ているものが質素よね」ってもらしておりましたが、男の私が見ても札幌のファッションはレベルが高いと思います。

最初にお話した通り、団塊の世代として高度経済成長期の真っ只中を企業戦士として生き抜いてきた私たちは、唯一、お金の尺度で物事を測るくせがついてしまいました。今の若い人たちにもそのDNAが引き継がれ、一昔以上も前にバブルがはじけたというのに、未だに古い尺度にしがみついてはいないでしょうか。

しかし、可処分所得だけではなく可処分時間、可処分空間の尺度も加味して考えれば様相は一変するはずです。時間と空間があれば夢も大きくなる。つまり、可処分ドリームだって膨らむはずです。東京の上辺の豊かさも一皮むけば内実は乏しく、一見厳しい状況に直面している北海道、札幌の方が時間、空間、夢を含めて心豊かに生活できるのではないでしょうか。

もし、今の格差論議がお金の尺度だけで行われているのだとしたら、そんなものはくそ食らえ、と言いたくなります。ですから、この講義のタイトルもそのものずばりにしたかったのですが、朝から品が無さ過ぎるので少しばかり手直しさせていただいた次第です。でも、その心はお金だけの格差論議なら、そんなもの放っておけ。〝格差〞があっても構わない。何もあせることはない、と言いたいのです。

フランスに学ぶ

先ほど、格差論議は昔からあったという趣旨のことをお話しました。高度経済成長の過程では総中流意識が芽生え、育つ中での格差論議が

盛んでした。今はどうでしょう。私の少年、青年時代に比べ日本人の生活水準は格段に向上しました。その意味では、総上流意識の中での格差論議といえるのではないでしょうか。

しかし、この国は本当に上流社会を実現しているのでしょうか。量はともかく、質の向上を伴った社会資本の整備が進んでいるとは残念ながら思えません。

東京オリンピックの開催に際し、首都の大改造が行われました。効率一辺倒の結果、東海道五十三次の基点であり今も道路原標が置かれている日本橋の上を首都高速道路でふさいでしまったのです。由緒正しき橋の景観は台無しです。最近になって高速道路の移設が話題になっていますが、一兆円近い工費がかかるというのですから何をかいわんやです。

フランスではこんなばかなことはしません。パリのセーヌ川の左岸には高速道路のほか鉄道も走っていますがいずれも川岸を掘り込む形で建設され、注意しないと見落とすほどです。アレクサンダー三世橋、ミラボー橋など有名な橋が何本もかかっていますがその景観が阻害されるようなことは一切ありません。

効率第一主義ではなく、心のゆとりがあると町の演出にも気くばりができるようです。私が滞在していた1989年は革命200周年の多彩な行事が催され、その一環でサミットも開催されました。

世界中から大勢の観光客を迎えるために主要な建物の修復、改修工事が行われた時のことです。歴史的建築物であるマドレーヌ寺院が工事用のシートですっぽり覆われたのですが、そのシートの外側に寺院の姿が原寸大で描かれているではありませんか。少し離れた場所に立つとこれまで通りに寺院が存在しているように見えるのです。この心憎い演出が報道されると、それを見にまた観光客が殺到しました。

10年ほど前でしょうか、札幌の時計台で改修工事が行われました。かなりの長期間に及んだのですがその間、現場は無粋なボードで覆われたままでした。市内の美術学校などの学生に時計台の四季でも描いてもらえばどれほど話題になったかとの思いを今でも禁じえません。

フランスかぶれを批判する冷たい視線を覚悟の上で、かの国に学ぶべき点をもう少しあげてみます。

パリの街では景観保護の観点から基本的に点滅のネオンサインが禁止されています。例外は薬局の緑十字のネオンです。夜の急病で気が動転している時でも見つけやすいようにとの配慮から許されているのでしょう。しかし、これはあくまでも例外であり、町全体は東京や札幌に比べて全体に暗く沈んでいます。

そんなパリにクリスマスがやってくると市内の随所でイルミネーションが美しく輝きます。それこそ息をのむ光景です。なぜそれほどまでに感動的なのかといえば、背景が闇だからです。とくにシャンゼリゼ大通りの電飾には毎年うっとりさせられました。

札幌のホワイトイルミネーションはどうでしょう。駅前通りに立ち、すすきの方面を見ると背景は毒々しいばかりのネオンの洪水です。道路の中央分離帯の木々に施された電飾がみすぼらしく見えて仕方ありません。いっそのことネオンを消し、その広告主がイルミネーションの電気代を負担したらどうでしょう。そうすれば電気の無駄づかいだとの批判にも応えられるのではないでしょうか。

好きですサッポロ

繰り返しになりますが、フランスに学ぶことは少なくありません。とはいえ、私自身、家族も含めて北海道、札幌が一番好きです。転勤のたびに、ため息をつきながら津軽海峡を越え、北帰行の際はバンザーイを叫んだものです。

札幌の写真家清水武男さんは、世界各地でシャッターを押してきましたが「世界中のどこを探しても、北海道のように豊かな四季に恵まれた土地はほかに無い」と断言しています。私も同感です。そこに住める幸せをつくづく実感しています。

先ほど東京の地下鉄で目撃した心が凍りつくような場面のお話をしましたが、反対に「札幌の地下鉄っていいよなー」と思う話をします。皆さんはお気づきでしょうか。札幌の地下鉄の自動改札機は常に扉が開いています。東京は常に閉まっています。JR も閉まっています。

かつて取材したところによると、札幌の地下鉄の開業に際し、当時の交通局の内部では相当な議論があったそうです。常に開けておくと不正乗車を助長するのではないかという人間性悪説があるのは当然です。しかし、性善説に立つべきだ。もし不正乗車しようとする者があればその時は閉めればよい —— という性善説が大勢を占め、結局、今日の姿になっているのです。

生き馬の目を抜くような東京ではそうは行きません。どうしても性悪説が主流となり、札幌のように〝人っこが良く〞はなれません。旧国鉄の JR も「お上」の意識が強く、正規の切符を持った人だけ「通してやる」といった発想があるのでしょう。

私が大好きな北海道、札幌ですがまだまだ不満な点もあります。この秋、プロ野球の北海道日本ハムファイターズが日本一になりました。私もサッポロドームに何回か足を運びましたが、そのつど、なぜ地下鉄がドームに直結していないのだとの不満が募ります。あと一駅分延長すればどれほど便利になるでしょう。

同じ交通関係で言えば JR の新千歳空港駅はなぜ行き止まりなのでしょう。苫小牧、帯広方面と行きかう列車も空港駅を通過するようになれば、いちいち南千歳駅で乗り換える必要はなくなります。このことを待望している乗客は少なくないはずです。

先日、北欧諸国に出張したのですが、朝の 7 時 40 分に新千歳空港を出発し、まず成田空港に行きました。その 5 時間後、再び新千歳空港の上空に逆戻りしてからヨーロッパに向かったのです。この 5 時間の無駄づかいには本当に腹が立ちました。東京中心のものの考え方だと国際線の成田発着は当たり前なのでしょうが、私は承服できません。欧州、北米路線の一部を新千歳空港に集約すべきです。それは道民のためだけでなく、新千歳空港と国内線で結ばれている各地の人びとの共通の利益にもなるはずです。

結びに

北海道に暮らす我々は可処分時間、可処分空間、可処分ドリームに恵まれている、お金の尺度だけにこだわってコンプレックスを抱く必要は無いと先ほど述べました。私の好きな北海道弁で言えば「なんもさ」の気概を持とうではないか、ということです。

とはいえ、ただ「なんもさ」をお題目のように唱えているだけでは進歩がありません。この愛すべき北海道、札幌をより素晴らしいわが故郷とするためには、今述べたような数々の不平、不満を解消する努力が欠かせません。そのためにも、皆さんのような若い人たちにもっともっと政治に関心を持ってほしいのです。

政治は、本来、世の中の矛盾や問題の解決に大きな力を持っているはずです。来年は統一地方選挙のほか参議院選挙、場合によっては総選挙も行われ、政権交代が現実のものとなるかもしれません。皆さんの一票の積み重ねがこの国の、北海道の、そして札幌の明日の進路を決めるのです。たかが一票ではなく、されど一票であることをよく理解して、貴重な選挙権を行使してください。

ご清聴有難うございました。